



言葉の意味から辿ってみると

日本語の「教育」という言葉は、「教えること」と「育てること」と書くわけですが、教えるというと、未だその子が持つてはいないものを「授ける」というニュアンスがありますし、育てるといって、既にその子が秘めているものを「育む」というニュアンスがありますよね。つまり、教えるといって、その子が知らない知識や技術や価値を付与するといって、やや厳めしい印象を受けますし、育てるといって、その子が抱えている欲求や性情や関心を尊重するといって、どこか優しい印象を受けますよね。でも、この言葉のニュアンスや素朴な直感は、教育の本質を考える上で、そう間違っただけのものとは思われません。

ドイツ語の辞書を引くと、「教育」を表す言葉に“Erziehung”という言葉と“Bildung”という言葉と2つ出てきます。前者は、その子の中に潜在しているものを「内から外へ引き出す」といって言葉です。因みに、「教育」を表す英語の“education”も全く同じ意味です。これに対して、“Bild”という語根は、「形」という意味ですから、後者は、その子に既存の文化や教養を伝達し、海のものとも山のものともつかないものの「形を成す」といって言葉です。ですから、久しく「教養」とも訳されますよね。

教育史では必ず触れられるヘルバルトという体系的な教育学者がおりますが、彼の教育観の本質は、一言でいって、この2つの側面から教育の全体像を言い当てようとするものでした。昔、ボン大学の教授の通訳をした時、その講演のテーマが正にこのヘルバルトの議論でした。特に通訳という仕事は、耳で解らせなければなりません。この2つの言葉が飛び交う内容だったものですから、さて何と訳そうか、学者の間でしばしば使われる「訓育」とか「教養」と突然いわれても、学生にはピンとこないでしょうし、まして双方を「教育」と訳しては、何が何だか分からないでしょうから、一方に「育て引き出す育成」といって訳語を当て、他方に「教え作り上げる形成」といって訳語を当て、この2つの契機が相俟って初めて「教育」になるという演者の議論を日本語にしたことがありました。むしろ原語に忠実な訳語と今でも思っています。

また、ヘーゲルという近代最大の体系的な哲学者は、教育は「家族の使命」と同時に、「社会の役割」といってありますが、家族の使命という時の「教育」には“Erziehung”を当て、社会の役割という時の「教育」には“Bildung”を当てていました。これも、教育のそれぞれの機能を明快に示唆した言葉遣いといっていいでしょう。だって、単純に考えても、家庭が学校のように、お母さんやお父さんが勉強ばかりを教える先生では、子どもはまいてしまいますもの。また、教室が居間のように、好きな時に炬燵に入り、テレビを視て、お菓子を食べながら授業を聴くというのでは、集団生活の訓練にもならないでしょうから。

ただ、忘れてはならないのは、教えるにしろ、育てるにしろ、その背景には「愛」がなければならぬことです。育むは、誰にも「慈しむ」を連想させる言葉ですが、『大言海』や『広辞苑』によると、「教」という言葉も、実は「愛む」から派生した言葉のようですよ。梵語では「鳥」のことを、1度目は卵として、2度目は雛として生まれることから「二度一生まれたもの」といいますが、そんなこともあって教育関係を象徴する「啐啄同時」とか「啐啄同機」という言葉も生まれたのでしょうね。*「啐」も「啄」も、共に「クチバシ」を指す言葉で、「ついばむ」といった意味がある。親鳥は内側の育ちの気配を察して、外側から殻をつつき始める、雛は揺籃の温かさの中で、それを感じて内側から殻をつつき始める、外からの力が加わり、内からの力が満ちて、新しい命が誕生するといった警句です。「同時」とは、その時を同じくすること、「同機」とは、人、つまりその心と同じくすることといった意味でしょう。

何れにしても、教える視点-育てる視点、どちらを欠いても、言葉としても、実態としても教育にはならないのです。教育学の専門家には、今更の話なのかも知れませんが、しかし普段の教育活動への眼差しや姿勢を振り返ってみるには、時々「教育」という言葉の意味を確認してみることも、存外大事なことではないかと思えます。

※「啐啄」は、「さいたく」とも読ませる。

[>前のページへ戻る](#)